

---

# 変わりなき世界の中で

サイレン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変わりなき世界の中で

### 【Nコード】

N2018Z

### 【作者名】

サイレン

### 【あらすじ】

小さな頃俺は真っ暗の世界にいた、何もかもがわからず、生きていくことすら億劫な人生だったが、そんな真っ暗の世界である日一人の女の子に救われた。

## プロローグ

俺の幼い頃の世界は真っ暗だった。

暗い暗い押し入れの中では何一つ見えず、何一つ聞こえず、毎日のように暴力を振るわれ、時々親の気紛れで食べ物やちよつとした物を貰う、そんな与えられた物だけの世界だったが、物を貰えるということに喜びを覚えた。

父と母は仲が悪かった、いや昔は良かったらしいのだが、俺が産まれてから何年かしてから子疲れしてしまった父は仕事をクビになり毎日、毎日酒やギャンブルに身を染めていた。

母はそんな父を見てわけのわからないことを叫び出したりしておかしくなっただけらしい。

俺は物心着いた時から俺は押し入れの中に閉じ込められていて、出ることを許されなかった、そして毎晩、毎晩狂ってしまった母に殴られる、俺が泣こうが逃げようとしてしようがお構い無く殴り続ける。『どうしてアンタなんて産まれて来たの!?』そう呪うように叫びながら…。

暴力は父も振るってきた、しかし母とは幾つも違うところがある、それはあの呪いの言葉を言わない事や、暴力が終わって酔いが醒めた後に必ず謝ってきたことだ。

『ごめんよ、俺が、俺がもっと強い心を持ってしっかりしていれば』と父は涙を流しながら俺を抱き締めるが、母の暴力にはまるつきり見て見ぬふりをする。

俺はそんな日々を五歳になるまで過ごして続けた人生の転機となったのは忘れもしないあの例年より暑い夏のある日だった。

その日は偶々、母の妹が小さな女の子を連れて遊びに来ていた。俺は誰かが来た時は押し入れで声を出す処か、音が出る行為を禁じられていたから、押し入れから聞き耳をたてて母や叔母がどんなこ

とを話しているかを聞く。

俺の両親以外は俺が押し入れに閉じ込められて虐待されていると言う事実を知らなかった。

母は他人が家に来るとやけに落ち着き、いつものように狂ったような呪詛を言ったりせずに平常心を保っている。

そんなときだった

叔母が連れてきた女の子はいきなり俺が入っている押し入れを開けた。

俺は聞き耳をたてる為に襖に張り付くようにしていたのでいきなり襖が開いたと同時に開けた彼女の直ぐ横に倒れ込んだ。

『きゃああああー』それと同時に叔母の叫び声と母の叫び声が響き渡る。

叔母は俺が今父と遊んでもらってるから居ないと聞いていたのにいきなり俺が出てきた事に驚き、母は今まで隠してきたことの発覚に恐怖し驚いた。

母はその後呆然として叔母が救急車と警察を呼んで連行される時に『私は悪くない、悪いのはあの子よ、そうよあの子が死ねば良いんだった』ぶつぶつ呟きながら俺の目の前から消えていった。

その数時間後に首を吊って自殺をした父が見つかり、その報告を受けた母はパトカーから飛び出し反対車線から来た車に轢かれて死んだらしい。

俺はたった1日で両親を無くしてしまった。

一方俺は栄養失調で倒れて病院に運ばれた。

医師や叔母が言うにはとても安心しきった顔でこのまま眼を覚まさないと思う程に寝ていたらしい。

その日から俺の日常が変わった、眼を覚ましてからまず見たのは、美味しそうな料理だった、見たことも聞いたこともない食べ物がある

を取り囲んでいた。  
そして何より世界全体が明るかった。

数ヶ月して元気になった俺は退院を許された、しかし俺が帰る場所  
は無く、事件の時側に居てくれた叔母が俺を引き取ってくれた。  
初めの方は誰一人信じられず、押し入れの中でうずくまっていた、  
そんな俺を変えてくれたのが俺を押し入れから見つけてくれた女の  
子だった。

彼女の名前は柴川彩、さいかわあや彼女は俺より一つ下なのに幼稚園が終わると  
毎日、毎日心配して押し入れまで来てくれた。

『ねえ、君の名前を教えてよ、それから一緒に遊ぼうよきつと楽  
しいよ?』

あまりにもしつこく押し入れを開けて問いかけてくるから、俺は前  
から気になっていたことを聞いてみた。

『どうして僕が押し入れの中に居るって分かったの?』

と聞いたら簡単そうに笑顔で答えた。

『当たり前だよ、だって君の助けてって聞こえたんだもん』

俺は今まで自分の生き方を不自由とは思ったが、辛いと思ったこと  
は無かった筈だ、それなのに彼女は俺からのSOS信号を受け取っ  
たと言っ。

俺はその時理解した、俺は本当に苦しかった事を苦しいと言わなか  
ったから知らず知らずの内に知らない誰かにSOSを出していたの

かもしれないと。

俺はその時彼女に賭けてみたいと思った、自分の何かを認めてくれそうだからだ。

だから俺は信じてみた、神なんていない、誰もが敵だと思っていたのに。

『僕は、あいはらゆうすけ相原祐介』

その時彼女は本当に嬉しそうに笑顔で俺に『よろしくね』、そう言ってくれた

その日から徐々に周囲の人とコミュニケーションを取るようになった。

もし、あの日、あの時彼女が俺に気づかずにいたら今の世界はあり得なかったのだろう、闇の中から俺を引きずり出してくれた彼女に今でも感謝している。

そして俺も彼女を守り、彼女のように人を助けられるようになりたい、そう願っている。

## 第一話（前書き）

ひとまず一話だけ投稿します。

## 第一話

「どうして俺には彼女が一人も出来ないんだああー！！！」

それは突然の出来事だった。

その日の授業もほとんど終わってこの一時間が終われば家や寮に帰れる、誰もがそう思っている矢先の出来事だった。

突然俺の一つ後ろの席の篠家大輔しのやだいすけが騒ぎ始めた。

俺とこいつは中学の時から腐れ縁というやつで、いつも馬鹿をやつてる相手だった。

「座らんか馬鹿もんがあああー！！！」

担任の明智総子あけちそうしが即座に怒声を浴びせると同時に手に持っていたチヨークを投げつけた

いつもながら見事な技だと感心していたのもつかの間で、首もとに光に当たって反射するナイフの様な物を向けられていた。

「うおっ！？」

（この学校でこんなことをする人は数人ぐらいだが、その中でもナイフを使うのはあの人だけだ！）

座っていた椅子を即座に蹴り、そのナイフの様な物を向けた張本人に直撃を狙い、距離をとる。

「……………」



襲撃者は何一つ語らず、ナイフを一閃させるだけで椅子を吹き飛ばした。

クラス内からは彼女の登場に口笛を吹き、歓喜を上げていた。

（お前らは一体どっちの味方だ、少しはクラスメイトを助けようとは思わないのか！？）

そうは思ったが、無駄だと割りきりしつかりと襲撃者を見据える。

「……………」

予想は出来ていたが、いざ対面すると恐怖が湧いてくる、何せ相手は隣のクラスの2年4組『佐上遊』（さがみゆう）、名前とは裏腹にふざけた事が大っ嫌いで風紀委員に勤めている校内では『沈黙の暗殺者』（サイレントアサシン）と呼ばれるほどの手練れなのだ。入学当初から彼女の勘違いで襲われ、あの殺傷能力ないが、触れれば痺れるナイフ『クロジア』を一度回避した後二度目の一振りで痺れさせられたのをよく覚えている、その時から俺は多少は出来る危険人物として目を付けられていたので、俺が馬鹿をやる度に自然と俺の前に立ち塞がる事が多くなった。

見た目こそは小柄で黒のポニーテールで可愛らしいのだが、校内の風紀を乱そうとした者には容赦がなく、『クロジア』を使い、相手に姿を見られる前に接近し、クロジアの力で痺れさせて事件を解決する、沈黙の暗殺者の由来もここから来ている。

因みに俺と今までの戦績は22戦17勝5敗となっている、そんな俺だが実力は低く雑魚敵もいいところ、簡単に説明すればマオに出てくるノココと同じぐらいの非力さだ、では何故俺がこんなにも勝ち越しているかと言うとちゃんとした理由があるが、今はとりあえず授業中＋無罪なので説得してみる。

「ちょっと待ってくれ、俺は授業妨害なんてしてないぞ、大輔が勝手に叫び始めただけだ、なあ皆」

そう言って皆を見渡してみるが、張本人の大輔はチョークによって撃ち抜かれ、臨終、他の皆は我関せずと言わんばかりに黒板に書いてあることをノートに書き込んでいる。

「……………」

（不味い、彼女から負のオーラが出ている、これでは俺の命が！）

選択肢

1 逃げる

2 戦う

3 教師に助けを求める

まあ、選ぶとすれば無難な3と言いたいところだが、俺には分かる、明智先生は間違いなくキレてる、見るあの手をプルプルと震わせ、チョークと言つ名の弾丸をリロードしまくってるじゃないか、今にも発射しそう　っ!?

「うおおおおっ!」

指から弾く様に発射されたチョークは佐上の頭を貫き、本日二人目の犠牲者となった、一方俺はと言うと、発射される瞬間に転がりながら椅子まで直行して、席に戻して座った。

「ふう、では授業に戻るぞ教科書のP15を竹下、お前が読め」

「うつす、えーと日本の経済は」

その後も授業は淡々と続いていた、俺の両サイドに額から煙を上げる二人を残したまま。

## 第一話（後書き）

続きは二日後ぐらいに投稿します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2018z/>

---

変わりなき世界の中で

2011年12月7日23時45分発行